

# 『源氏物語』の勝利      「絵合」巻の光源氏勝利の意味

著者	横溝 博
雑誌名	他者をめぐる思考と表現：日仏間の文化的移行
ページ	77-78
発行年	2017-09-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00122131">http://hdl.handle.net/10097/00122131</a>

## 『源氏物語』の勝利——「絵合」巻の光源氏勝利の意味

横溝 博

『源氏物語』「絵合」巻では、絵合のイベントにおいて、『竹取物語』『伊勢物語』『うつほ物語』『正三位物語』といった作品の絵が番わされ、左右の議論が拮抗する中、最終的には源氏方から「須磨の絵日記」が披露されるに及んで決着がつく。源氏の勝利は、物語世界において、源氏の政治力が優位になったことを強く印象づける。しかし、当時を代表する物語作品に対して、源氏の「須磨の絵日記」が圧倒したという構図は、単にフィクションの次元に止まるものではない。これは先行する物語に対する『源氏物語』の文芸作品としての勝利をも、高らかに宣言するものである。

このように、『源氏物語』を過去の作品とは比べものにならない、優れた作品であることをアピールする意図とは何か。ことは紫式部のパトロンでもあった権力者・藤原道長の、文化的・政治的手腕の卓越さを称えることに直結する。じつに、『源氏物語』という長大な作品を制作するにあたって、物理的・人的援助を惜しまなかった道長は、名実ともに『源氏物語』成立の立役者であった（紫式部日記）。そのように、『源氏物語』の創作を支えた道長を称讃することは、主家に仕える紫式部に求められる当然の義務であったのだ。

紫式部がこうまでして、『源氏物語』の卓越さをアピールするのには、もう一つの理由がある。それは同じく一条天皇の時代に、清少納言によって書かれた『枕草子』が、貴族たちの間で大きな評判となっていたことへの対抗意識である。道長が最高権力者であった当時、『枕草子』に描かれる中宮定子と道隆の時代の文化に対する人々の憧憬は依然根強いものがあつた。道長はこうした状況を何とか覆し、文化的優位を手中にしたいがために、紫式部に『源氏物語』を書かせた

のである。当時、物語作者は匿名であったが、そのタブーを破ってまで名前をあらわし、『源氏物語』の作者として振る舞ったというのは、清少納言を意識するものに他ならない（紫式部日記）。

『源氏物語』はこのように優れて戦略的なテキストであり、現実世界に影響を及ぼすべく、様々な仕掛けが張りめぐらされた政治的なテキストである。「絵合」巻での源氏の勝利は、物語史における『源氏物語』の勝利であると同時に、現実の宮廷社会においては、紫式部の物語作家としての自負の表明と、主家賛美とに結合するように仕組まれたものでもあった。そして、奇しくもこのような紫式部の振る舞いが、宮廷社会の中で物語作家の地位を向上させたことは、紫式部の功績として記憶に留めてよい。現に天喜3年（1055）5月3日には、18名もの女房が齋院に集まり、それぞれ新作した物語を持ち寄って優劣を競い合う「物語合」というイベントが営まれるのである。ときに時代は道長の息・頼通の時代であり、本イベントの後援者であった。

（東北大学大学院文学研究科准教授）